

1

(1) 原点を中心とする回転角 $\frac{\pi}{6}$ の回転変換は行列 $\begin{pmatrix} \cos \frac{\pi}{6} & -\sin \frac{\pi}{6} \\ \sin \frac{\pi}{6} & \cos \frac{\pi}{6} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \frac{\sqrt{3}}{2} & -\frac{1}{2} \\ \frac{1}{2} & \frac{\sqrt{3}}{2} \end{pmatrix}$ によって定義さ

れる線形変換である。したがって、点 $P(1, -3)$ の像は $\begin{pmatrix} \frac{\sqrt{3}}{2} & -\frac{1}{2} \\ \frac{1}{2} & \frac{\sqrt{3}}{2} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 \\ -3 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \frac{\sqrt{3}}{2} + \frac{3}{2} \\ \frac{1}{2} - \frac{3\sqrt{3}}{2} \end{pmatrix}$ 。

(2) 仮定から、 $f_A \circ f_B (= f_{AB})$ は恒等変換である。 f_{AB} が恒等変換となるのは、 $AB = I_2$ のときである

から、求める行列 B は A の逆行列である。 $A^{-1} = \frac{1}{-4 - (-3)} \begin{pmatrix} -2 & 1 \\ -3 & 2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 2 & -1 \\ 3 & -2 \end{pmatrix}$ 。

(3) ベクトル \vec{a}, \vec{b} を並べて行列 $N = \begin{pmatrix} \vec{a} & \vec{b} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & -1 \\ 2 & 3 \end{pmatrix}$ をつくる。この行列に左から M をかけると、

$$MN = M \begin{pmatrix} \vec{a} & \vec{b} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} M\vec{a} & M\vec{b} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \vec{a} & -2\vec{b} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 2 & -6 \end{pmatrix}$$

となる。 $N^{-1} = \frac{1}{3 - (-2)} \begin{pmatrix} 3 & 1 \\ -2 & 1 \end{pmatrix} = \frac{1}{5} \begin{pmatrix} 3 & 1 \\ -2 & 1 \end{pmatrix}$ より、

$$M = \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 2 & -6 \end{pmatrix} N^{-1} = \frac{1}{5} \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 2 & -6 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 3 & 1 \\ -2 & 1 \end{pmatrix} = \frac{1}{5} \begin{pmatrix} -1 & 3 \\ 18 & -4 \end{pmatrix}。$$

2

(1) 「線形変換 f の固有値が λ である」とは、 $f(\vec{v}) = \lambda\vec{v}$ を満たす零ベクトルでないベクトル \vec{v} が存在することである (または、 $f = f_M$ のとき、 $\det(\lambda I_n - M) = 0$ となること)。

(2) 「線形変換 f の固有ベクトルが \vec{v} である」とは、 $f(\vec{v}) = \lambda\vec{v}$ を満たす実数 λ が存在することである。

(3) 固有多項式は

$$\det(tI_2 - M) = \det \begin{pmatrix} t+1 & -3 \\ -18 & t+4 \end{pmatrix} = t^2 + 5t - 50 = (t+10)(t-5)$$

であるから、固有値は 5, -10 である。

固有値 5 の場合、 $5I_2 - M = \begin{pmatrix} 6 & -3 \\ -18 & 9 \end{pmatrix} \xrightarrow{\text{行基本変形}} \begin{pmatrix} 2 & -1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}$ より、固有ベクトルは $c \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \end{pmatrix}$

である。

固有値 -10 の場合、 $-10I_2 - M = \begin{pmatrix} -9 & -3 \\ -18 & -6 \end{pmatrix} \xrightarrow{\text{行基本変形}} \begin{pmatrix} 3 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}$ より、固有ベクトルは

$c \begin{pmatrix} 1 \\ -3 \end{pmatrix}$ である。ただし、 c は 0 でない任意の実数である。

3

$$\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = M \begin{pmatrix} X \\ Y \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} a \\ b \end{pmatrix}$$

- (1) $y = 2x^2 + 4x - 1 = 2(x+1)^2 - 3$ であるから, $x+1 = X$, $y+3 = Y$ と座標変換すればよい. つまり, この場合は $M = I_2$, $a = -1$, $b = -3$.
- (2) 上の座標変換の式中の M は基底の変換行列である.

$$(\vec{e}_1 \quad \vec{e}_2) = (a_1\vec{e}_1 + b_1\vec{e}_2 \quad a_2\vec{e}_1 + b_2\vec{e}_2) = (\vec{e}_1 \quad \vec{e}_2) \begin{pmatrix} a_1 & a_2 \\ b_1 & b_2 \end{pmatrix}$$

より, $M = \begin{pmatrix} a_1 & a_2 \\ b_1 & b_2 \end{pmatrix}$.

- (3) (1) の結果から $y = 2(x+1)^2 - 3$ であるから, $x+1 = Y$, $y+3 = X$ と変換すればよい.

これは $\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} Y \\ X \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} -1 \\ -3 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} X \\ Y \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} -1 \\ -3 \end{pmatrix}$ である. したがって,

$$M = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix}, \quad a = -1, \quad b = -3.$$

4

- (1) 0 でない実数 k に対し, $O(0:0:0:k)$ である. たとえば, $(0:0:0:3)$ など.
- (2) 透視投影の定義にしたがって求めてもよいし, 公式に代入して求めてもよい. ただ, 視点 $(10, 2, 3)$ と, 移したい点 $P(-8, 2, 3)$ を通る直線は yz -平面 ($x=0$) に直交する. よって, その直線と投影面の交点 (投影像) の座標が $(0, 2, 3)$ であることが直ちにわかる.
- (3) この問題はすでに授業中の課題として出しているのので, ここでの解説は省略する (講義ノート p.73 を参照せよ.).